歯科衛生士のための口腔内写真の重要性と実際

日時：平成26年9月7日（日）
場所：株式会社モリタ（京都）

後藤　洋次（兵庫県）

先日、平成26年9月7日（日）に京都三条のモリタにて第二回日本インプラント臨床研究会関西支部の研修会が行われました。

今回は、衛生士教育研修会として行われ、「一人一人が同じレベルで撮影できるように」と題して、9クリニック．27名の参加者があり関西支部の歯科衛生士部の意識の高さが伺えました。

中野喜右人副会長の開会の言葉で始まり、本会副会長でJSOI認定講習会講師の大田善秋先生をお迎えし、午前中は講義、午後から実習という予定で行われた。午前10時の開始から講師の大田先生は休憩も取らず、「初診時の口腔内は二度と記録できないので患者さんの治療に入る前に絶対記録しておくように！」と言われ、「カルテやレントゲンに勝るとも劣らない重要な証拠である！」と2時間。講演していただき、その合間に、当日それぞれのクリニックから持参した受講生のカメラやミラーのチェックに回り、その中で何名かの受講生はミラーに傷があったり汚れがあったりし、大田先生に院長の名前を聞かれ困ったような顔をしていた場面もありました。

[口腔内写真の目的]

1．記録として⇒カルテ、レントゲン、プロービングチャート、治療計画等
2．臨床への反省⇒臨床上の問題点の発見、解決、治療の改善、向上
3．ケースプレゼンテーション⇒スタディーグループ、学会、雑誌発表による客観的判断
4．患者さんへの提示・教育⇒患者さんからの信頼
5．経過観察⇒適切な処置
6．スタッフ教育⇒院内勉強会での教育及び信頼関係の強化

撮りたいものを大きく中心で捉え、いつも同じような構図で撮ることが、トリミングや修正の手間を省く近道であるとおっしゃていました。

午後からの実習は、ユニット1台に3人ずつに分かれ相互実習の形で行いました。口腔内撮影(15枚法)は先ず撮影者の顔を撮り、それから交代して口腔内の撮影を行いました。

[口腔内写真の撮影ポイント]

1．目的とするものを大きく写す
2．余分なものを映し込まない
3．ミラーと口角鉤を上手に使う
4．ポジショニングを適正にする
5．患者さんの協力を求める（リラックスしてもらう。無駄な力をぬいてもらう）

普段、特に意識もせず撮影していることですが、やはりそれぞれの個性と言うか癖がありその癖を講師の先生が一人一人にアドバイスされ、全員が一定レベルの写真を撮れるように成った頃には、重たいカメラを支えていた腕には疲れがたまっていたことでしょう。

小休止後、5名の会員発表がありました。(Dr.1名、Dh.2名、Dt.1名)

1. 河瀬　敦
「インプラント患者に対する
栄養学を基にした指導法について」Dr.

（脂肪酸　　ω3：ω6＝1：3）

2. 植田結衣
「インプラント周囲病変の治療に関して」Dh.

（インプラント周囲粘膜の違和感）

3. 平尾明日香
「マグネットデンチャーにおける
メインテナンスについて」Dh.

（患者の高齢化とメンテナンス）

4. 青木菜穂子
「当院の治療の流れと歯科衛生士の役割」Dh.

（衛生士の患者受け持ち体制の将来性）

5. 藤江匠摩

「DTから見た、シェードテイキング」Dt.

それぞれの立場から、多様な発表が有り充実した会員発表になったと思います。

また、内々の発表ですので気楽にできるのも当研究会の良いところではないでしょうか。

他のクリニックのDH.も自医院の患者へのアプローチを紹介したり、自身の経験なども交えて活発な意見交換が行われ、特に、DH.の患者受け持ち性の是非については、我々Dr.も考えさせられるような意見もありました。

明日からの臨床に直結するディスカッションになったと思います。

講師の大田先生と参加者全員で記念写真